

第3回

第1章 青年期の課題と自己形成

青年期の位置づけと特徴

今回学ぶこと

青年期は子どもから大人へと移行していく重要な時期である。歴史的に青年期がどのように出現したのかについて理解し、また青年期の多様な変化とその特質について理解する。そのうえで、自我のめざめがどのような過程をたどるのかについて、その意義を含めて学習する。



講師
千田有紀

今回のキーワード!

マージナル・マン / 心理的・社会的モラトリアム
自我 / シュプランガー

大人になるための猶予期間

わたしたちは、さまざまな区分を移り変わって（赤ちゃん、子ども、青年など）生きていく。こうした区分と区分を移行するときの儀礼のことを、「通過儀礼」（イニシエーション）と呼ぶ。

フランスの歴史学者アリエスによれば、12世紀以前の子どもの姿は「小さな大人」として描かれており、7歳にはすでに大人と一緒に働く存在だったという。現在は、教育期間が長期化するとともに、結婚年齢もあがっており、第二の誕生のあとの「青年期」の期間が長くなっている。

ドイツの心理学者レヴィンは、この青年期にある、“大人でも子どもの重なりあいの上にたつ青年”を、マージナル・マン（周辺人、境界人）と呼んだ。アメリカの精神分析学者エリクソンは、社会的な責任や義務が猶予されている青年期の状態を「心理的・社会的モラトリアム」と呼んでいる。

青年期の多様な変化

青年期には、大きな変化が訪れる。まず身体的な発達の傾向としては、身長や体重が急激に増加する（青年期スパート）。さらに二次性徴などの性に関する身体の変化も現れる。社会的発達としては、第二反抗期の出現がある。

最初の反抗期である第一反抗期も、自立のための反抗であるが、第二反抗期も、心理的に親から独立しようとし、心理的離乳が進む。その契機の一つとして、恋愛などがあげられる。これらの反抗は、社会に目を向けさせて、生活に変化を持たせ、成長を促すという意味で重要である。しかしその一方で、壁にぶつかったり、挫折したりすることもある。近年の青年には、大人になろうとしない傾向と同時に、やさしさや素直さもみられることも特徴としてあげられている。

自我の発見

ドイツの哲学者、教育学者シュプランガーは、「青年ほど深い孤独のうちに、ふれあいと理解を渴望している人間はいない」といっている。青年は、自分自身の自我の存在を自覚し、世界から切り離された自分、つまり自我を感じるものである。このような自我のありかたは、自分を理解してもらいたいと強く願う一方で、簡単に理解されることを拒否するというアンビバレント（相反する感情）な側面を持っている。このような自分はなぜ今の自分なのか、なぜ自分はここに存在しているのかと考えるような意識の経験である自我体験は、とても重要である。

自分の孤独を体験し、自分のもつ感情を見つめ、自分を理解することによって、他の人もまた同様の他者なのだという他者を理解するという契機につながっていく。